

弥次さん喜多さんのお笑いにほんご塾

作 齋藤 孝
原作 十返舎一九（『東海道中膝栗毛』）

「弥次喜多」と
楽しく旅をしながら
日本語の達人になっちゃおう！
こんな言葉が使えたらカッコいいぞ！





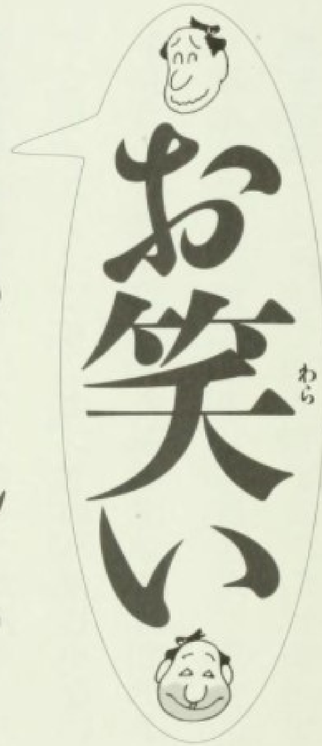
（クイズ）
上のイラストの中に、
日本語の慣用句がかくれているよ！
見つけてごらん！
（答えはカバーの後ろソデにあります）

PHP研究所



長良川
木曾川
琵琶湖
天竜川
矢作川
京都
大井川
浜名湖
伊勢神宮
伊勢

弥次さん喜多さんの お笑いにほんご塾



作 齋藤 孝
原作 十返舎一九
(『東海道中膝栗毛』)

PHP

この本を読むみんなへ

齋藤　孝

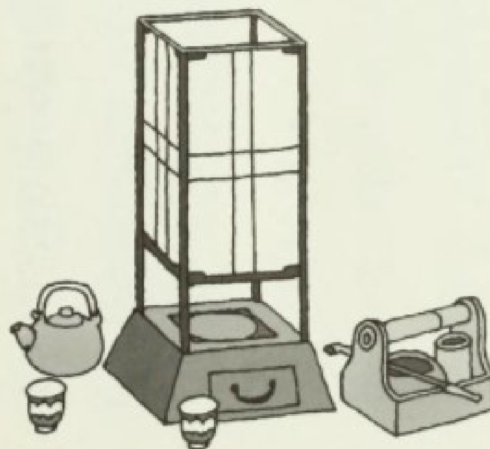
さぁみんな、おもしろくてためになる、お笑い日本語の旅へようこそ。
僕は小学生のとき、『東海道中膝栗毛』っていう本を読んで、弥次さん、喜多さんの大ファンになっちゃったんだ。バカみたいなことばっかりやっててサイコー。でも、ホントのバカじゃない。「だじゃれ」や「ことわざ」をドンドン使って話をする。じつはふたりは日本語の達人だったんだね。
みんなにも、弥次喜多（弥次さん、喜多さんのこと）の日本語力のすごさを味わってほしくて、僕はこの本を書いた。おもしろくて便利な言葉をたくさん、もうムリヤリ入れこんでパワーアップさせてみました。
まずは本文を読んで、それから「弥次さん喜多さんの日本語よもやま話」でカンペキにしてくれたまえ。

一　さぁはじまるよ



駿州府中（すんしゅうふちゅう）◆

弥次さん喜多さんのお笑いにほんご塾　目次



装丁●多田　和博　装画・本文挿絵●つだ　かつみ　本文デザイン●NEKO HOUSE　編集協力●輔老　心

さぁはじまるよ、日本一の旅物語。お笑い道中（旅行）、夢道中。その名も東海道中膝栗毛。

抱腹絶倒（大笑い）、疾風怒濤（ハラハラドキドキ）、天下無敵（だれにも負けない）の男が行く。おもしろいし、ためになる、一石二鳥（ふたつに役立つ）のお話だ。

とざい、とーざいー（さあさあ、すみからすみまで）。どちらにお住まいのみなさんも、この話を聞いていきなさい。

うっかり者の弥次さんと、男前（ハンサム）



江戸の昔、十返舎一九が書いた『東海道中膝栗毛』。弥次さんと喜多さんが、今の三重県にある伊勢神宮へのおまいりのため、東海道を旅していく。東海道といえばみなさんご存じ東海道新幹線だが、もちろんふたりは「のぞみ」なんかに乗りはしない。ぜいたくしても、ほんのときたま馬か籠に乗る程度。長い道のりをてくてく歩き、夕暮れには宿をさがす毎日だ。

しかしこの旅、そりゃーめっぽうおもしろい。何巻にもわたる『膝栗毛』はすべて、ポケモンかワンピースかという大ヒット。弥次喜多コンビは、そのへんの芸人などくらべものにならない人気者。みなさんにもそのおもしろさ、十分味わっていただきましょう。

この弥次さんは、みかけがすごい。

色が黒くて目が三角、口は大きくヒゲだらけ。足は水虫だらけでガッサガサ。

さらに、寝息のくさいことったらありゃしない、まわりの人の鼻が曲がっちまうくらいだ。おまけにスケベときたもんだ。

こんな男は、きらわれ者の、**鼻つまみ者**の、厄介者になってしまうと昔から相場が決まっている。

仲間はずれ

そういうことになっている

ところがどっこい、親は大金持ちで、百両や二百両のお金には困らないほどの財産があったというから、運がいい。

そこそこの大金

役者の喜多さんが、お江戸八百八町をあとにして、お伊勢まいりの旅に出るよ。

（お江戸八百八町：たくさんの町が集まった大都市・江戸）

さぁ、わっしょいわっしょい盛り上がれ。

昔っから、**かわいい子には旅をさせよ**、というじゃないか。

（子どもがかわいければ苦労させよ）

案ずるより産むが易し、千里の道も一歩から、犬も歩けば棒に当たる、ってんで、そこのけそこのけ弥次喜多が通る。

（なやむよりやっちゃうほうがカンタン）

（長い道のりもはじめはまず一歩）

（何かをはじめれば思いがけないこともある）

では、出発の前にこのふたりを紹介しようじゃありませんか。

弥次さんの名前は栃面屋弥次郎兵衛といいまして、駿州（駿河）府中、今でいう静岡市の生まれでございます。

ハナミズハナノスケ。

しかし弥次さんにとっちゃあ、運命の出会い、ここにあったり。この鼻之助こそ、のちの喜多さんなんであります。

喜多さんは、**やせてもかれても**役者のはしくれ、**腐っても鯛**。さすがに色男で、ジャニーズに入れてもなんとかごまかしてやれるくらいの器量よしだった。

落ちぶれたって
もとがいいので、なんとかなる
カッコいい人

おまけに**一を聞いて十を知る**、**目から鼻へ抜ける**、頭のよさだったので

少し聞いただけで、ぜんぶがわかる
とてもかしこい



おかげで弥次さんは、酒や遊びに**湯水のごとく**金を使う**すねかじり**。
思いっきり　親の金にたよる生活

まわりから親不孝者といわれても、これが、

馬の耳に念仏、**馬耳東風**、**豚に真珠**、**猫に小判**。
聞く耳もたず　知らん顔　何をいわれているのかもわからない

泣く子も黙る、**太っ腹**な遊び人になってしまった。
おそろしい　堂々とした

その弥次さんが**入れこんだ**のが、たまたま駿州府中にやってきた旅芸人、華水多羅四郎の一座にいた、華水鼻之助という役者さん。
気をひこうと金をあたえた

なんともしまらない名前じゃぁございませんか、ハナミズタラシロウに





なんて好き放題やってるうちに、とうとう実家の金を使いはたし、その
うち借金地獄におちてしまった。

あります。

このブ男と男前、一見正反対に見えるふたりが、**馬が合った**っていうから人生は不思議。ふたりは**傍若無人**、そばに人がなきがごとくの**放蕩三昧**、遊びのかぎりをつくすのだった。

（馬が合った：気が合った）
（傍若無人：人目を気にせず）
（放蕩三昧：好き勝手をし放題）

「**金は天下の回りもの**、ホイ」
金は使ってこそ世の中を回っていくもの

「生きてるうちが花なのよ、ホイ」

「**死んで花実がなるものか**、ホイ」
死んでしまえばいいこともない

「**明日は明日の風が吹く**、ホイ」
明日のことを今日なやんでもしょうがない

「レット・イット・ビー、ホイホイホイホイ」
なるようになるさ

オレたちゃ逃げ足の速さがとりえ（いいところ）だからね」

弥次「ま、逃げだすなら夜。夜逃げってのはドキドキ、ワクワクするねぇ。
しばらく駿河ともおさらばじゃ」

なんて**失礼千万**（めちゃくちゃ失礼）なことをいっている。そして、

借金は富士の山ほどあるゆえに
そこで夜逃げを駿河ものかな

「駿」と「する」をひっかけたダジャレ短歌を、最後っ屁プーとばかりにのこし、**這々の体**（やっとの思い）で逃げだして、華のお江戸へ移り住むのであります。

ふるさとにいられなくなったふたりがどうしたか、というと……、

弥次「ふつうは、**立つ鳥あとをにごさず**、って
出て行く者はあと片づけをしていく
いうけど、オレたちゃフンだらけで、
にごしまくって逃げちゃうもんねー。

脱兎のごとく」
逃げるウサギのように

喜多「なんでぇ、その脱兎のごとくって？」

弥次「ウサギみたいに逃げ足が速いってこ
とでぇ」

喜多「そりゃあ、いい言葉だねぇ。



弥次さん　喜多さんの　日本語よもやま話



抱腹絶倒

「抱腹」は、腹を抱える、「絶倒」は、ハデに倒れることだ。「腹を抱える」って言葉は大笑いするときに使うことは知ってるな。つまり、「抱腹絶倒」は、笑いころげるってぇわけだ。



疾風怒濤

「疾風」は「はやて」ともいう。すごく速い風のこと。「怒濤」は荒れくるう波。激しい風と波に、吹き飛ばされたり、持ち上げられたり振り落とされたり……。まぁ、ジェットコースターみてぇなもんだ。



天下無敵

もちろん、このオレのこと。文字どおり、「天下に敵無し」。世の中にまともに戦う相手になるものがいないほど強い、すごいってことだぁ。オレに張り合おうと思ってもムダだよ。おとなしくしてな。



一石二鳥

鳥を落とそうとして石を投げたら、ひとつの石で、二羽の鳥が落ちたってわけだ。こいつはラッキー。ひとつで、ふたつのいいことがある。「おもしろくて、ためになる」、オレらの話も「一石二鳥」ってことさ。



弥次さん　喜多さんの



鼻つまみ者

・イヤなにおいがしてきたら、すぐに鼻をつまむだろう。その場所から離れようともするだろう。そんなふうに、みんなからイヤがられたり、きらわれたり、遠ざけられたりするヤツのことだ。



湯水のごとく

風呂に湯をいっぱいに張り、ざば〜んと飛びこむ。もちろん湯は、ざんざんあふれるが、そんなことは気にしねえ。もったいないだの、足りなくなったらどうしようだの、そんなこたぁ考えねえ。これが「湯水のごとく」の心意気だ。まあ、ペットボトルで買ってたんじゃぁ「湯水のごとく」は使えないかもしれねえな。



すねかじり

・「すね」は、足のひざから下、足首までのところ。自分で働いて生活していくことができずに、親やきょうだいの金にたよって生きていくことを、人の「すねをかじる」っていうんだな。



馬の耳に念仏

「念仏」は、「なむあみだぶつ」のように、仏様の名前を唱えること。だけど馬が聞いたって、そのありがたさはわからねえ。で、もちろん聞きやしない。わからないヤツには、何をいってもムダってこと。

日本語よもやま話



かわいい子には旅をさせよ

旅は楽しいとはかぎらねぇ。ためしにひとりで出かけてみな。まわりは知らない人ばっかりで、親や家族みたいにやさしくしてくれるわけじゃねぇ。でも、そうして世間の風に当てることが、子どもを強くし、成長させるってもんだ。だから、本当に子どもがかわいいなら、ちゃんと、苦労をさせとけってことさ。



案ずるより産むが易し

「案ずる」は、心配する。「易し」は、カンタン。はじめる前に、あーだ、こーだと心配するより、実際にやっちまえば、意外にカンタンってことだな。やってみちまえば、なんとかなるってもんさ。



千里の道も一歩から

「里」は、距離をあらわす単位。「千里」ってのは、とっても長いってことだ。でも、どんなに長い道のりも、はじまりはいつだって最初の一歩からと決まってる。まぁ、とにかくはじめてみるか。



犬も歩けば棒に当たる

「いろは歌留多」にもある言葉だ。「棒に当たる」ってのは、思いもかけない災難や、ぎゃくに幸運に出会うってこと。何かをしようとすれば、やっぱりなかなか思いどおりにはいかないもんだ。

弥次さん　喜多さんの



太っ腹

・「腹」には、その中に、その人間の気持ちや考えがおさまっているって感じがあるんだな。たとえば、ずるくてイヤなヤツを「腹黒い」なんていうだろう。「太っ腹」は、その「腹」が太い、大きいってこと。気持ちが広くて、大きくて、小さなことでウジウジなやんだり、ビクビクしたりはしねえんだ。



やせてもかれても

人にはいろいろ変化がある。つらい目にあうこともある。でも、どんなにやせておとろえようが、落ちぶれてぼろぼろになろうが、見る人が見りゃ、もとの姿がわかるってことよ。



腐っても鯛

鯛といやぁ魚の王様。姿は美し、味はよし。おまけに、こりゃ「めで鯛」ときたもんだ。たとえほっとかれて腐っても、鯛のよさはなくならねえ。もとがよければ、多少の傷はなんとかなるということさ。いいものは、やっぱりいいってことだねぇ。



一を聞いて十を知る

ちょっと話をはじめると、そこから話の全体を読みとって、「わかった」と、答えが返る。こりゃ話が早いね。気持ちがいいね。だから頭がいいヤツは大好きだ。

日本語よもやま話



馬耳東風

これまた馬の耳の話で、今度は「東風」。風はただ通りすぎるだけだ。馬のヤツ、気にもしなけりゃ、聞きもしない。人が何を話そうが意見しようが知らん顔、ってぇときに使う言葉だ。



豚に真珠

真珠ってぇのは貴重なものだ。価値がある。まぁ、オレたち人間様にとってはな。ところが豚にはどうだろう。食べられるもんでもなけりゃ、何かの役に立つもんでもない。だから、どうでもいいわけだ。どんなにリッパなものやすばらしいものでも、その価値がわからないヤツには関係ないし、ありがたくもないってことだな。



猫に小判

「豚に真珠」と同じで、猫に金をやったって、価値がわからないから、意味がないってこと。猫にやるくらいなら、オレによこせってことだな。



泣く子も黙る

だだをこねて、泣きじゃくる小さな子には、どんな大人も手を焼くもんだ。何をいっても聞きやしねぇ。だが、そんな子どももぴたりと泣きやむ。それほどおそろしいのが「泣く子も黙る」オレ様だぁ。

弥次さん　喜多さんの



金は天下の回りもの

金は、自分のふところに、じっととどめておいてもしょうがない。止まっているもんじゃねえからな。使ってやってこそ、世の中を動いてぐるりと回って、いつかはオレのところにもどってくるのさ。



死んで花実がなるものか

花が咲いたり、実がなったりするように、世の中には、いい結果を手に入れたり、リッパな身分になって楽しい思いができたりすることがあるもんだ。でも、すべて生きてるうちのこと。死んじまっちゃあ、しょうがねぇ。



明日は明日の風が吹く

いってみりゃ、今日が終われば一度リセット。明日になれば、何かが変わって、いいほうにころがることもあるだろう。そのときがきたら考えよう。今から、先のことをいろいろ考えて、なやんでみたってしかたねぇってことよ。



立つ鳥あとをにごさず

飛び立つ鳥は、それまでいた場所を、フンも何も、見苦しくないように、片づけてから出ていくそうだ。まぁ、いなくなるときは、まわりに迷惑をかけないように、すべてきちんとしてから行けってぇ教えだな。



目から鼻へ抜ける

目のすぐ下には鼻があるだろ。だから、目から鼻へは近くて早い。つまり、りこうで、頭の回転が速く、聞いたことを理解するのも、答えを出すのも、早いってこと。そのうえ判断や行動もすばやくて、損になるようなことはしないってわけだな。



馬が合う

馬は古くから、人に飼われ、身近にいる動物なんで、馬についての言葉は多い。で、馬に乗るときは、馬と乗り手の呼吸がぴったり合えば、ウマく乗れるというもんだ。そこから、人と人の気が合うときも、馬が合うっていうんだな。



傍若無人

「傍ら」は、そばに、近くにってこと。何かしようと思ったとき、もしそばで人が見ていれば、ヘマしたらみっともないとか、カッコ悪いとか思ってやめることもあるだろう。だが、だれも見ていないとくりゃ、気にならない。「傍若無人」は、人がいようがいまいが関係なしに、人目を気にせず、好き勝手に行動することだ。



放蕩三昧

「放蕩」も「三昧」も、心のまま、自分のほしいままに熱中し、ほかのことは考えないで、やりたい放題にすることだ。

二　お伊勢まいりへ

江戸　神田八丁堀◆



弥次さん　喜多さんの　日本語よもやま話



脱兎のごとく

「脱兎」は、逃げる兎、脱走する兎のことだ。ウサギはもともと足が速い動物の代表みたいにいわれるが、臆病者だし、逃げるときには、さらに速い。何かにおどろいて、あっという間に逃げちまうウサギのように足が速い、ってぇことだ。



失礼千万

「千万」をつけると、数が多くなる。なんといっても、「千」と「万」だ。つまり、より程度が大きくなる、ひどくなるってぇことだ。たんなる失礼じゃなく、とても失礼、失礼このうえないわけだ。「無礼千万」なんて言い方もあるな。



這々の体

「這」は、這う。つまり、這うようにしてってことだ。ひどい目にあったり、さんざん責められたりして、身をちぢめ、小さくなって、コソコソと、やっとの思いで逃げだすことだ。

さあてさてさて、江戸に移ったふたりの暮らしっぷりはというと……。**昔取った杵柄**、**三つ子の魂百まで**、**栴檀は双葉より芳し**、といいますように、ふたりは急に変われない、クルマは急に止まれない。いいかげんでだらしないダメ男ぶりにますます**拍車が掛かる**ばかり。おいしい江戸前の魚のうまみにの

昔取った杵柄：一度身につけたうで前
三つ子の魂百まで：年をとっても性質は変わらない
栴檀は双葉より芳し：成功する人は子どものころからめだつ
拍車が掛かる：いきおいがつく



ところで、弥次さん喜多さんが出かけたお伊勢まいりは、江戸の人たちが、一生に一度は行ってみたいとあこがれる人気イベント。そもそも当時の人たちが旅行をするのは大変だった。何のためにどこに行くのか、ちゃんとお上に届けを出して、手続きしなくちゃいけなかった。出かける理由が、伊勢神宮へのおまいりならば、おやまあリッパ、よい心がけと、チェックもだいぶ甘くなる。御陰年という特別な年ならば「おかげまいり」で、さらによい。おまいりの人には親切にと、食事だ宿だと助けてもらえることもある。グループでおまいり旅行する人も多いので、まぎれこめれば得もある。というわけで、ふたりは伊勢をめざすのだった。

割れ鍋に綴じ蓋、割れた鍋にも合う蓋があるもので、世の中、捨てたもんじゃありません。

どんな人にも相手はできる

とはいうものの、「**宵越しの銭は持たねぇぜ**」なんて江戸っ子をきどって好き放題ぜいたくをするうちに、**二度あることは三度ある**、またしても借金取りのお世話になった。

今日の金は今日使う。明日にはのこさない！

二回あった悪いことは必ず三回くり返される

二進も三進もいかなくなった。

まさに**四面楚歌**、まわりは敵だらけの**背水の陣**。

味方は見えず

絶体絶命の立場

窮鼠猫を噛む、状況だ。

追いつめられ、必死になれば何でもできる

弥次「ここで**一発逆転**、**起死回生**のアイデアってぇのはないものかねぇ？」

一気にぜんぶ解決

生き返って完全復活

めりこんで金を使いはたしたあとは、ふたりが住む神田八丁堀の家ったら、その地域のなまけものたちの寄り合い場所になってしまった。

お酒のとっくりがいつもひっくり返ってて、下手な三味線がいつもビンコラ鳴っているようなひどい部屋。

江戸の町からしてみれば、弥次さん喜多さんは**飛んで火に入る夏の虫**、お金を使ってくれるいいお客さんだったのかもしれません。

自分からあぶないところへ飛びこむ人

いいことといえば、弥次さんがお嫁さんをもらったことくらい。

蓼食う虫も好き好きといいまして、こんなダメな男にも奥さんができたのです。

人の好みはさまざま

このふたり、逃げだすばかりのお気楽人生なんでございます。

弥次「おい喜多さん、今度はどこに逃げだそうか？」

喜多「**厄払い**（災難を払い落とす）の旅にでも出たほうがいい」

弥次「そうだ、お伊勢さんにおまいりしよう！」

喜多「弥次さん、そりゃあ、いい思いつきだ。お伊勢まいりなら、みんながやること。借金取りも**大目に見て**（少しはやさしくして）くれるだろう。
おかげまいりの道中といやぁ、功徳（よいおこない）になるといって、ただで寝泊まりさせてくれるし、ごはんもくれるだろう。
渡りに船（困っているときにちょうどいい）、川を渡ろうと思ったところに、つごうよく船が来たような

と、自分のことを棚に上げて、棚からぼた餅、瓢箪から駒、がないかと考えている。

棚に上げて：ごまかして
棚からぼた餅：運がころがりこむこと
瓢箪から駒：ありえないラッキー



喜多「ついでに、もうちょっと借金してみっか？」

なんてばかりに、ふたりは旅の出発を決めてしまった。

喜多「じゃ、いつ行く？」

弥次「**思い立ったが吉日**だ。**善は急げ**っていうだろう。

思いついたらすぐやるのがベスト　よいことはすぐやれ

本日、弥次郎兵衛と喜多八は、**着の身着のまま**お伊勢さんに向かって

何のよういもしないで、このまま

しゅっぱーーつ！」

喜多「駿州府中まで行けば、またお金が借りられるしね」

こうして、お江戸日本橋から伊勢、京都へ、ひたすら歩きつづける旅がはじまった。

ナイスなアイデアだ！」

弥次「オレたちゃ、根っこはやすのは、にあわない。浮き草みたいな生き方しかできねぇんなら、浮き草らしく行くまでよ！」





昔取った杵柄

「杵柄」ってのは、餅つきに使う杵の、手でにぎる部分。つまり、昔、杵を持ってじょうずに餅をついた、あのうで前はおとろえてねえ。やれっていうなら、今でもリッパにやって見せるさ、ってこと。若いころ身につけたワザは、年をとっても十分使えるって意味だ。



三つ子の魂百まで

「三つ子」は、双子、三つ子じゃあない。三歳の子ども、小さな子ってことだ。そのころの心や考え方は百歳まで続く。つまり、人間の性格や性質は、年をとっても変わらねえってことだな。



栴檀は双葉より芳し

「栴檀」は、ビャクダンっていう、めっぽういい香りのする木。この木は、芽が出たばかりの双葉のころから、い〜い香り。だから、将来すばらしい成功をする人は、小さなときから、その素質や才能を発揮しているもんだって。



拍車が掛かる

「拍車」は、乗馬用のくつについている金具。オレたちの時代にはまだなくて、明治時代に、西洋から入ってきたんだな。これで馬の腹を打って、速く走らせる。つまり、力がくわわってより速く進む、いきおいよくなることなんだ。

奇想天外、奇妙きてれつ。
（予想もつかない考え　何ともおかしな）

言語道断、空前絶後、百花繚乱の
（とんでもない　ありえない　事件もいっぱい）

ボケとツッコミ珍道中がはじまるの
であります。

思い立つ日を吉日とせん。

とにもかくにも、当たって砕けろ、
（ダメでも一度やってみろ）

いざ出発なのだ。



弥次さん　喜多さんの



二度あることは三度ある

同じことが二回おきたら気をつけろ。注意しないと、きっと三度目がある。失敗や災難なんかは、くり返されることが多いって教えだな。



四面楚歌

昔の中国に、楚という国があった。この国が漢と戦ったとき、漢の劉邦って将軍が、うまい作戦を立てたんだ。楚の項羽って将軍をとりかこんだ自分の軍隊に、敵の楚の歌を歌わせたんだな。これを聞いた項羽は、味方の楚の人たちが降伏し、漢の軍につかまったと思っちまった。「四面楚歌」は、まわりじゅうから楚の歌が聞こえること。つまり、まわりはぜんぶ敵。味方はいないし、助けも来ないってことなんだ。



背水の陣

背中に水。つまり、うしろは水辺で、あともどりはできねぇ。攻めてくる敵に向かって進むしかない。そんな形で自分の陣、つまり基地や隊列をつくるんだ。それだけ必死、決死の覚悟ってことだな。



窮鼠猫を噛む

「窮鼠」は、追いつめられた鼠。逃げ場がなくなり、ついにネコをガブッ！弱いものでも、強いものに必死で反撃すれば、勝てることもあるってもんだ。



日本語よもやま話



飛んで火に入る夏の虫

「飛んで火に入る夏の虫」ってのは、あんまりりこうじゃぁねえ。夏の虫は、光に集まってくるだろう。で、明るい火に飛びこんで、死んじまうってわけだ。人でも、自分からあぶないところへドンドン向かって行くヤツがいるよな。で、ひどい結果になる。だれとはいわねぇけどな。



蓼食う虫も好き好き

「蓼」は辛くて、とても食えないような葉っぱ。でも、その蓼が大好きで、喜んで食う虫もいる。まあ、虫も人も好みはいろいろ。まわりにはよくわからんが、それなりのよさがあるのかねぇ。



割れ鍋に綴じ蓋

ひびが入ったり、割れたりした鍋には、こわれた蓋を綴じてつなげたのが合うってこと。どんなヤツにも、なんとか相手がみつかるものだし、にたもの同士なら、うまくいく。結局、相手に高望みする前に、自分をよく見ろってことか……？



宵越しの銭は持たない

江戸っ子の心意気だい。「宵」は夜。「宵越し」ってのは、夜を越して次の日だ。江戸っ子は、金をちまちま、次の日までとっておいたりはしねぇもの。その日に稼いだ金は、パッとその日のうちに使っちまうんだ。

弥次さん　喜多さんの



瓢箪から駒

「駒」は、馬のこと。瓢箪のあの小さな口から、でかい馬が出てくるなんて、実際はあるわけがねぇ。つまり、考えられないようなこと、思いがけないことがおこるって意味なんだ。冗談でいったことが、本当になっちまったときにも使うな。



大目に見る

規則どおりにきびしく罰をあたえたり、しかったりするんじゃぁなくて、大きな目、大きな心で見るってことよ。よーするに、罰を甘くしてくれたり、見逃してくれること。オレは大かんげいだね。



渡りに船

川を渡ろうと思ったが、歩いては渡れないし、橋もねえ。どうしたもんかと思っていたら、そこにつごうよく船が来た！　このすばらしいタイミング。これぞ「渡りに船」ってわけだ。



思い立ったが吉日

「吉日」は、何かをするのにいい日ってことだ。つまり、何かをしようと思いついたら、「いつやろう……」なんてぐずぐずまよってみたり、「明日？　いや、あさってからはじめようかな」なんて先にのばしたりしねぇで、思いついたその日、すぐにはじめるのが一番ってことだな。



日本語よもやま話



一発逆転

ひとつの何かで、それまでのことをぜんぶドーンとひっくり返す。わかりやすいのは、野球だな。一発のホームランで逆転勝利、ってなわけだ。



起死回生

「起死」も「回生」も、死んだ人、死にそうな人を生き返らせるってぇ意味だ。死んだようなひどい状態、どうしようもないところから、生き返る、立ち直る。オレたちゃ、いつも「起死回生」だ。



棚に上げる

たとえば、親や家族に見せたくない物やさわられたくない物があるとする。そしたら、それを高い棚の上にかくして知らん顔。自分につごうの悪いことは、関係のない顔をして、ほったらかしておくわけさ。まぁ、ほめられた手じゃねぇけど。



棚からぼた餅

ぼた餅は好きかい。甘くてうまいよな。ふつうぼた餅を食うためには、金を稼いで買いに行くとか、材料を集めてつくるとか、何かの努力をするわけだ。ところが、棚の下でぼんやりしてたら、上からぼた餅がポトッ。こりゃラッキーっとパクリ。よーするに、運がころがりこんでくること、ラクしていい目にあうことなんだ。

弥次さん　喜多さんの



言語道断

もとは仏教の言葉で「言葉で説明する道を断つ」。悟りの境地や深い真理は、言葉ではいいあらわす方法がない、ってことだった。だから、昔はいい意味に使われていたらしい。でも、今では、言葉にできないほどひどい、とんでもない、もってのほかだ、って意味で使うぞ。



空前絶後

「空前」は、前は空っぽ。今まで、こんな例はなかった。「絶後」は、後は途絶える。この先、こんなことは二度とない。よーするに、後にも先にもこれっきり。それほどめずらしい、まずありえないこと、ってえわけだ。



百花繚乱

さまざまな種類の花が、いっせいに咲きみだれる様子のことだな。色とりどりで、そりゃぁきれいだ。そこから、花、すぐれた人や、すごい美人、はたまたすばらしい出来事なんかがいっぱい、ってときにも使うんだ。たとえば、歴史上のある時代に、後世に名をのこすようなすごい人がたくさん集まっていたとき、その後もずっと残る芸術作品や学問上の成果なんかが一度にたくさん生まれたときに、「百花繚乱の時代」なんていうわけだ。

日本語よもやま話



善は急げ

たとえば、お年寄りに席をゆずろうと思ったが、なかなかいいだせないでいるうちに、その人が駅で降りちまった、なんてことがある。いいと思ったことは、ぐずぐずせずに、さっさとやれ。「善は急げ、悪は延べよ」ともいうな。



着の身着のまま

たとえば、火事や地震にあった。家からいろんな物を持ちだす余裕があることもある。非常用持ちだし袋、なんて物を用意していることもある。でも寝間着のまま、はだしのまま、何も持たずに、とにかく逃げるしかないことだってあるよな。これが「着の身着のまま」ってぇわけだ。



奇想天外

「奇想天外より落つ」といってな、とてつもなく変わった考えや思いつきってのは、ふつうの世の中の外側から降ってくるってんだ。つまり、常識では考えられない、みんながびっくりするようなことだな。



奇妙きてれつ

「奇妙」も「きてれつ」も、めっぽう変わっていたり、不思議だったりするって意味だ。それがふたつ重なっているわけだから、よっぽどヘン、おかしい、わけがわからん、ってぇ感じだな。



三　ダンゴと江ノ島

神奈川～藤沢の宿



当たって砕けろ

この「砕ける」は、失敗するとか、うまくいかないってぇことだな。何でも、成功するかどうかは、やってみなくちゃわからねぇ。だからって、はじめる前から「やってみようか、でも失敗したらどうしよう……やっぱりやめようか」なんて、なやんでばかりじゃしかたがない。とにかく、気持ちを固めてぶつかってみろ。砕けたらそのときのことだろう。さぁ行くぞ！

えっちらおっちら歩いて、旅はちょうど神奈川の宿を出たところにさしかかった。

弥次さんのところへ、小僧がひとり寄ってきた。

小僧「だんなさま、一文くだせぇ」

一文：ほんの少しの金

弥次「やろうとも。

旅は道連れ、世は情け。

旅はひとりじゃつまらない、世渡りも互いに仲よくしよう

袖振れ合うも多生の縁、

道ばたで袖がふれた人とも何かの縁がある

っていうからな。

てめぇ、どっから来た？」



さて、江戸時代の五街道より、東海道は、江戸と京都を結ぶ道。五十三次と申します。これは街道にある宿場町。歩いて往復、三十～四十日かかるという東海道。もちろん宿がなくては困る。江戸は日本橋にはじまり、品川、川崎、神奈川……と、宿場町には、旅人を迎える宿がならんでいる。

ただし、宿にもいろいろあった。食事や風呂つき、ゆっくりとくつろげる旅籠屋もあれば、寝る場所があるだけ、飲むも食べるもご自分で、という木賃宿。これは、ふところぐあいに合わせて選ぶしかない。このほか、ところどころに旅人向けの茶屋がある。餅やダンゴをほおばりながら、ちょっと一服、ひと休み。

口から出任せ（何も考えずいいかげんに）、立て板に水のごとく（すらすらと、よどみなく）ウソがわいて出てきます。小僧をからかっているのです。

小僧「与次郎兵衛は知らねぇが、与太郎どんなら、わしらのとなりさ、おるでよ」

弥次「おお、その与太郎よ、その家にのん太郎という年寄りのじいさまがいるはずだ」

小僧「じいさまはたしかに年寄りに決まってらぁ」

弥次「それで与太郎どののおかみさんは、たしか女だっけ？」

小僧「おかみさんは女だよ。よく知っていなさる」

小僧「わしは奥州（東北）のほうから来ましただ」

弥次「あぁ、**一目瞭然**（一目でわかる）だ、てめぇの笠にでっかく〈奥州〉って書いてあらぁ。

おっとこりゃあ、**万に一つ**（めったにない）の偶然だ。おいらもてめぇの近所にいたもんだ。

縁は異なもの、味なもの（人のつながりは不思議でおもしろいもの）。こいつぁなつかしいねぇ。

で、つかぬことを聞くが、畠山の与次郎兵衛どのは達者（元気）でいるか？」

もちろん、弥次さんは東北なんかにいたことはありません。いつものお調子者が顔を出し、**ウソ八百**（ウソをならべて）、**ホラを吹いた**（でたらめをいった）だけ。

自分の名前が弥次郎兵衛。一字をかえて、与次郎兵衛ってわけ。

小僧「おじちゃん、先に餅を買ってくれよ。
そしたら、いうことはぜんぶ聞いてあげるからさぁ……」

喜多「ハハハハハハ、こりゃあ**一本取られた**（やられた）**ね**」

弥次「かついでいるつもりが、かつがれちまった。
近頃の小僧は**抜け目がねぇ**（ずるがしこい）。**油断も隙もありゃしない**（まったく気を抜くヒマがない）。
子供だからって甘く見てたら、こっちが痛い目にあっちまう。
子供のほうが**一枚上手**（ワンランク上）だった。**機転の利く**（場の空気が読める）、**末恐ろしい**（この先すごい人物になりそうな）小僧どもだ。
将来、**ひとかどの者**（人より成功する大物）になるだろう」

てな馬鹿なことをやってるうちに、藤沢の宿の茶屋に着きました。

小僧は、お金がほしくて弥次さんに話を合わせてきますが、心の中では、

「そんなの**あたりきしゃりきのこんこんちきのブリキ**だよ」

当たり前に決まってる

と思っている。弥次さん、すっかりいい気になって、

弥次「小僧さん、餅を買ってやろう」

といって、餅を五つ六つ買ってあげました。

すると、別の小僧さんがやってきた。

弥次「てめぇはどこだって？

ははぁこれも奥州か、笠にでっかく書いてある。

これ、てめぇの村に与茂作ってぇオヤジがいるだろう？」

弥次さんと喜多さんが、煙草をすって待っていると、風呂敷を背負ったオヤジが、店先に立ち止まった。

オヤジ「もし、ちょっとおたずねしますが、江ノ島へはどう行きますか?」

ふざけんぼうの弥次さん、またしてもからかいの虫がうずきだした。

弥次「おまえさん、江ノ島へ行きなさるか。**おっと合点承知之助**。まかせてくれ。お寺の前に橋があるから……」

はいよ、わかった





弥次「あぁ、腹へった。**腹がへっては戦ができぬ。**まずは腹ごしらえだ。

腹ペコでは何ごともうまくいかない

ばあさん！　ダンゴをあっためてくんな」

ばあさん「へい、焼き直してしんぜましょう」

弥次「えぇい、てめぇはだまってろ。

その道をずっと行くと、村はずれに茶屋が二軒ある」

喜多「そうそう。よく腐った物を食わせる茶屋だ」

弥次「そりゃ、てめぇがいうのは右側の茶屋だろう。

左側の茶屋は、よかったぞ。ピチピチする鯛、イキのいいエビがはねる。おすいもの、卵としいたけと……」

オヤジ「もしもし、わしはそんなものは食わずともようござる。

そこからまたどう行きます？」

弥次「そこをずっと行くと、石の地蔵様がありやす」

弥次さんが説明しだすと、喜多さんも、悪ふざけにくわわった。

喜多「いやぁほんとに橋といやぁ、べっぴん（すごい美人）さんのいる茶屋があったっけ？」

弥次「ああ、それそれ。去年おいらが泊まった家だ。

あのべっぴんは江戸の女よ」

喜多「どうりで気が利いてらぁ」

オヤジ「もしもし、その橋からどう行きますんです？

そんな女の話はよござんす。話をわき道にそらさないでくださいな」

弥次「その橋の向こうに鳥居があるから、そこをまっすぐに……」

喜多「曲がると田んぼに落っこちやすよ」

弥次「あぁそうかー！」

オヤジさん、話が思いっきりそれてしまうので、さすがに怒りだした。

オヤジ「そんなことより、江ノ島へ行く道を教えてください！

時は金なり、あたしゃ急いでいるんです」

時間がもったいない

弥次「おぉそうだった。すっかり忘れていた。

ま、いいじゃねーか、怒りなさんな。

急がば回れっていうじゃねぇか。

急ぐときほど落ち着け

急いては事をし損じるともな」

あせると結局失敗する

オヤジ「江ノ島ですってば！」



喜多「あの地蔵様は皮膚病にきくんだよね」

弥次「ほんに皮膚病といやぁ、金箔屋のたぬ吉は、草津の温泉に行ったっけか、どうしたろう？」

喜多「たぬ吉は、結婚して、大福町に家族をもってらぁー」

弥次「大福町ってのはどこだ？」

喜多「大福町は、オレたちの住んでた通りをまっすぐに当座町へ出て、そろばん橋を渡ると、そこが大福町だ」





そこへ茶屋のばあさんが、真っ黒黒助なダンゴを焼いて持ってきました。

弥次「むむむ？　こいつぁ、真っ黒なダンゴだ。
ありゃりゃ、まだ火がついてらぁ。
しかし、ばあさんに文句をいうのもかわいそうだ。

大人げない。
いい年をしてはずかしい

弥次「は、江ノ島だったな。どこまで話したっけ？

あぁ地蔵様だ。その地蔵様から大福町をまっすぐに行くとな……」

オヤジ「江ノ島へ行くのも、そんな町がござるか？」

弥次「いやいや、それは江戸の町だっけ？　頭がこんがらがってきたぞ。

こりゃ、**前後不覚**、**五里霧中**、**茫然自失**に**右往左往**！」

（何がどうなった　わからない　オレはどうした？　あっちかこっちか！）

オヤジ「ええい、この衆は、まったく**埒の明かない**人たちだ。

（答えの出ない）

江戸のことなんぞ聞いとりゃせんぞ。まるで**本末転倒**だ。

（本題を忘れている）

仏の顔も三度まで。さすがに**堪忍袋の緒が切れた**ぁ〜」

（私のガマンにも限度がある　もうたえられない！）

オヤジさんはぶつぶついいながら行ってしまいました。

弥次「はははははは。てめぇはあったかいのがいいかと思って、火のついたダンゴをやったのさ。
まぁ、**喉元過ぎれば熱さを忘れる**、っていうじゃねぇか」
（つらいことも過ぎてしまえば忘れていく）

喜多「ええい、いまいましい。
自分がやったくせに、自分を棚に上げてよくいうよ。
過ぎたるは及ばざるがごとし、って孔子様もいってらっしゃるぜ」
（やり過ぎは、たりないのと同じくらいひどい）
（孔子様：昔の中国のえらい先生）

弥次「これも旅の思い出よぉ。気を取り直して、**心機一転**、**前途洋々**で出発しよう。ばあさん、お世話になったな」
（心機一転：気分を変えて）
（前途洋々：希望いっぱい）

ふたりはお茶代を置いて、次の宿場町へと向かいました。

物は考えよう。（ここはいいほうに考えよう）こりゃあおもしろい代物だから、喜多さんに食わしてやろう。……、おい、喜多さん、ダンゴが来たよ。おまえはこげたダンゴがよかろう?」

喜多「お、待ってたぞ。どれどれ、パクパク。……。アツツツツツツツー－－－－－－ッ、**油断大敵**、（不注意が一番あぶない）火がぼうぼう、注意一秒ケガ一生。ば、ば、ば、ばあさん！　まだ火がついているじゃないか！　とんだ目にあわせてくれたなぁ。口がぴりぴりすらぁ！」



弥次さん　喜多さんの



縁は異なもの、味なもの

・どっちかってえと、男女の仲に使うことが多い言葉だ。どうしてこいつとこの人が……みたいなことがあるだろう。どこでどんなふうに出会って、つきあいだすのかはよくわからない。不思議で、おもしれえもんだなあって意味だ。



ウソ八百

「八百」は、実際に八百数えるって意味じゃねえ。とにかくたくさん、数が多いってことだ。「江戸八百八町」っていうときと同じだな。だから、ウソをたくさんならべること、ウソばっかりってことだな。オレ様はそんなことはしない……？



ホラを吹く

法螺貝って知ってるか。でっかい巻き貝なんだが、それに穴をあけて、笛のように吹くんだ。山伏が遠くの人への合図に使ったり、武士が戦いの合図に鳴らしたりする。で、この音がものすごくでかい。そこから、話をどんどん大きく大げさにして、ウソやでたらめをいうことを「ホラを吹く」っていうんだな。



口から出任せ

「出任せ」は、出るまんま、ほったらかしってことだ。つまり、いきおいで言葉が口から出るにおまかせ、いいかげんなことをいうってわけだ。

日本語よもやま話



旅は道連れ、世は情け

ひとり旅ってのはさびしいよな。喜多さんのような仲間がいれば、バカもいい合えるし、何かあっても助け合える。だから、旅には仲間、道連れがいるほうがいいもんだし、世の中だって、お互い、仲よく助け合うほうがいいってもんだ。



袖振れ合うも多生の縁

仏教の教えでは、人は死んでも何度も生まれかわるんだな。「多生」は「他生」ともいう。今生きている世界とは別の世界。いわゆる前世とか来世のことだ。知らない人と、たまたま袖が振れ合ったような関係でも、じつは前世や来世で深い関わりがあるもんだ、人と人との関係は、偶然じゃないんだぞ、って教えなんだ。



一目瞭然

「瞭然」は、はっきりわかること。つまり、一目でわかる、だれが見てもはっきりしてる、ってことだ。オレがいい男なのは、「一目瞭然」だな。



万に一つ

そのまま考えりゃ、一万分の一。まずありえない確率だ。だから、めっぽうめずらしいってこと。ただし、可能性は0じゃない。だから、もしかしたらって意味で、「万一……」「万が一……」とも使うな。

弥次さん　喜多さんの



油断も隙もない

昔、中国の王様が、家来に油がいっぱい入ったはちを運ばせて、一滴でもこぼしたら「命を絶つ」といったのが、「油断」ってぇ言葉のはじまりらしい。気をゆるめたり、不注意になることだな。「隙」は、物と物の間。油断するとつけこまれそうだから、ほんの少しの「隙」も見せてはだめだ。絶対に気は抜けねぇ、集中しろってことだ。



一枚上手

「上手」ってぇのは、上を行く、人よりまさっているってことだな。「一枚」は、ここでは、紙なんかを数えるんじゃなくて、一段、一ランクって意味。よーするに、ランクが上ってわけだ。



機転が利く

「機転」は、まわりをよく見て、その場に合わせた判断ができる力。空気が読めるってやつだな。「利く」は、効果的に使うこと。その場に合わせ、うまく切り抜けるのが、「機転の利く」ヤツなんだ。



ひとかどの者

ひとかどは、「一角」と書く。人よりすぐれている、人なみ以上って意味だ。リッパなヤツ、力のあるヤツ、大したヤツって感じだな。



日本語よもやま話



立て板に水のごとく

板を立て、その上から水を流してみな。何もひっかかるものがねぇから、どんどん気持ちよく流れるだろう。そんなふうに、つっかえたり口ごもったりしねぇで、すらすらと流れるようにしゃべること。オレたちのようにな。



あたりきしゃりきのこんこんちきのブリキ

ふつうでいや「当たり前」ってことなんだが、この言葉はいまいちヤボだ。で、「あたりき」っていうようになったんだが、これだけじゃ、語呂がよくねぇ。そこで「き」で終わる言葉を重ねて、いきおいよく、しゃれた言い回しにしたわけだ。



一本取られた

柔道や剣道で「一本!」ってぇのを聞いたことはないかい? 技がきっちり決まって、その勝負に勝つことだ。「一本勝ち」なんていうだろう。だから、「一本取られた」は、「やられた!」「負けちまった!」ってことだな。



抜け目がない

抜けたところがない、手抜かりがねぇってことだ。まわりに十分注意をはらい、自分が不利になるような穴は絶対つくらない。よく気がついて、損をしないようにいつもうまく立ち回る。こういうヤツが、「抜け目のないヤツ」だ。

弥次さん　喜多さんの



急いては事をし損じる

「遅刻だ！」と大あわてで家を飛びだして、気がついたら、せっかくやった宿題を家に忘れてた。まあ、人間あせればあせるほど、ついつまらない失敗をするもんだ。だから急ぐときほど、まず一度深呼吸。落ち着いて、冷静にならないとな。



前後不覚

「不覚」は、意識がはっきりしなくて、感じたり考えたりできなくなっちまうこと。よく「酔っぱらって前後不覚になる」っていうよな。もう前に何がおこったのか、その後どうなったのか、ってこともわからない。なんにもわかんねぇんだ。



五里霧中

「里」は距離の単位で、五里は、今の言い方でいや、約二十キロってところだな。この五里の範囲が全部霧。その中にいるわけだ。もちろんまわりは何も見えやしない。様子がまったくわからずに、どうしていいかわからねぇ、ってことだな。まちがって「夢中」って書かないようにな。



茫然自失

「茫然」は、あんまりおどろいたり、あきれたりして、気が抜けること。「自失」は、今の自分のことも忘れちまう。つまりショックでボーッとして、わけがわからなくなっちまうことだな。

日本語よもやま話



腹がへっては戦ができぬ

人間、腹がへっていちゃあ、力も出ないし、いい考えもうかばない。集中しようと思っても、食い物のことを考えちまう。実力を発揮できねえってことだ。だから、何をするにも、まず腹ごしらえ。コンディションを整えようぜ。



おっと合点承知之助

「合点」も「承知」も、「わかってるよ」「知ってるよ」とか、「OK、いいよ」「そうしよう」ってなときに使う言葉だ。どうせ、いい返事をするんなら、ノリのいい言葉にしたいもの。で、「おっと合点承知之助」ってえいうわけだ。



時は金なり

金ってえのは大事なもんだ。無駄に使っちゃあいけねえよ。だけど、金と同じくらい、大切なものがある。それが時間だ。じつはこれ、西洋からきた言葉。英語でタイム・イズ・マネーってんだ。



急がば回れ

急ぐとき、近道があるのなら、あぶない道やよく知らない道でも、ついそっちを選んじまう。でもそれが落とし穴。回り道でも、安全で確実な道のほうが、結局早く着く。急ぐときほど、多少時間や手間がかかっても、確実なほうがいい。失敗したらやり直す時間がもったいないからな。

弥次さん　喜多さんの



堪忍袋の緒が切れる

人はみな、イヤなことをガマンして、「堪忍袋」に、怒りをしまいこんでいるわけだ。その大きさは、人それぞれだけどな。で、その袋が一杯になれば、いつかは口をしばっているひもが切れて、一気に爆発！　よーするに「もう、ガマンできない！　いいかげんにしろ」ってこと。



大人げない

大人ってぇのは、それなりの落ち着きや分別があるもんだ。ところが、年齢は大人でも、そうじゃないヤツもいる。落ち着かねぇし、つまらんことにムキになる。はずかしいよな、喜多さん。



物は考えよう

たとえば、コップにジュースが半分入っている。「もう半分しかない」とも考えられるし、「まだ半分ある」とも思えるわけだ。どっちを選ぶかは、その人しだい。同じことでも、よくも悪くも考えられるってぇわけだ。



油断大敵

「油断」は、気をゆるめたり、不注意になること。ちょっと気を抜いた結果が、大失敗につながることもある。だから、油断は、めちゃくちゃ強い敵と同じくらい、おそろしいもんなんだ。注意しろよ、気をつけろよ、って教えだな。



日本語よもやま話



右往左往

文字どおり、右へ往ったり、左へ往ったり……。おどろき、あわてて、あちこち、じたばた動き回ることだな。



埒が明かない

「埒」は、馬の稽古をする場所（馬場）のまわりをかこんだ柵のことだ。柵を開いて、中に入らなきゃ、馬の稽古もはじまらねえ。先へ進めないわけだ。で、答えが出なくて問題が片づかない、なかなか決着がつかないことを、「埒が明かない」っていうわけだ。「埒」が、決まった場所をかこんでいるから、決まりごとやルールがみだれていることを、「埒もない」ともいうな。



本末転倒

「本」ってのは、基本、根本。つまり物事の中心だ。「末」は枝の先っぽ。小さなこと、つけたしの部分だな。この「本」と「末」が、ひっくり返って逆になる。よーするに、オマケのほうに夢中になって、大切なことをいいかげんにしちまうわけだ。



仏の顔も三度まで

人から急に顔をなでられたら、だれでも気色悪いよな。でも情け深くて、おやさしい仏様なら怒らない。だからって図に乗っちゃぁだめだ。三度もやったら、さすがに怒る。どんなにおだやかな人だって、ガマンには限界があるってこと。

四　風呂騒動





喉元過ぎれば熱さを忘れる

熱いお茶をぐっと飲む。でも、熱いのはほんのいっとき。喉を通り過ぎれば、もうへっちゃらだ。同じように、苦しかったことも過ぎてしまえば忘れちまうし、困ったときに人の世話になったことも、ラクになれば、どっかへいっちまうってことだな。



過ぎたるは及ばざるがごとし

昔、中国の孔子ってえらい先生がいったんだ。物事には、ちょうどよいところというものがある。ほどほどが大切。限度をこえてやり過ぎちまえば、結局、たりないのと同じ。どっちもよくないってな。



心機一転

「心機」は心のはたらき、気持ちの動き。「一転」は一度にドッとかわることだ。何かのきっかけで、パッと気持ちが切りかわることがあるだろう。これが「心機一転」。意識して、自分で気持ちを切りかえるなら、「心機一転する」だな。



前途洋々

「前途」は、将来、これから進む道のこと。「洋々」は、水が満ちあふれる様子から、希望がいっぱいなことをいう。よーするに、この先は大いに期待できるぞ、きっといいことがたくさんあるにちがいない、ってえ意味だな。

そうこうしているうちに、ふたりは、小田原の宿に泊まることになりました。

喜多「よぉ、弥次さん、湯がわいたらお風呂に入りやしょう」

弥次「おめぇはなにも知らねぇなぁ、湯がわいたら熱くて入れるもんか。水がわいて湯になったら入りやしょうとぬかせ」

喜多「あーいえばこういうヤツだ。**揚げ足取り**め。

揚げ足取り：細かいことにうるさいヤツ



さて、江戸の時代には、ふつうの家には風呂はない。家でゆっくり風呂につかれるのは、身分の高いごく一部の人たちにかぎられていた。かわりに町で繁盛していたのが、湯屋とよばれるお風呂屋さん。朝から夕方まで営業し、毎日、汗を流す人たちでこみ合っていた。

今でも、「旅の楽しみは食事と温泉！」、という人も多いものだが、当時の旅でも、旅籠屋での食事と、風呂はうれしいぜいたく。歩きつかれた体を休め、ホッとくつろぐこの幸せ。

ところがわれらが弥次さん喜多さん、不思議な風呂に出会ってしまった。旅してみれば、日本は広い。知らないことが山とある。さあ、どうする？

に入ればいいものかいな?」

この宿のお風呂は、上方(大阪)ではやっている五右衛門風呂という方式なのでした。

五右衛門風呂の底は鉄製です。かまどに火をたき、その上に釜をのせたように、風呂が置かれています。釜ゆでにされた大どろぼう、石川五右衛門にちなんでこの名前がついているのです。

入り方もかわっています。風呂釜には木の丸い板がうかんでいる。この板をふみこんで、しずめながら入ります。

そうすると、足の裏が熱くない。この板がないと、釜の鉄底に足が当た

言葉尻だけとらえてへりくつ抜かすな！」

言葉尻　言葉のはし
へりくつ　くだらないりくつ

女中「もし、おふたかた、お湯がわきました。お入りなさいませ」

弥次「おお、水がわいたか、どれ入りやしょう」

手ぬぐいをさげて弥次さんが風呂場へ行ってみると、これまで見たことのない、風呂桶のでっかいのがあるばかり。

弥次「あ？　はて、どうやって、どこ



肝がつぶれちまったあ。どうやって入るもんだか、見当がつかねぇ。
びっくりした

ここは思案のしどころだ。
しっかり考えないと

かといって、どうやって入るのか他人に聞くのもしゃらくせぇ。
いまいましい

うーむ、百戦錬磨、海千山千のこの弥次さんをなめるなよぉ〜。
あれこれやってきて　世の中を知りつくしている

悪戦苦闘、試行錯誤、臨機応変！…………。
困難と戦い　失敗しながらも　なんとかうまくクリアする！

おっ？　便所にゲタがあるぞ。

こいつぁ、おもくろい。あっ、まちがえた。おもあかい。そりゃおもしろいだろってんだ。

少々きたなくたってしょうがねぇ。

ってしまって、熱くて入れたもんじゃない。

ところが、五右衛門風呂、初体験の弥次さんは勝手を知りません。

釜にうかんでいる丸い板をふただとかんちがいして、とってしまいました。

弥次「さてと、入るぞ。よっこいしょ。

アチチチチチチ、足の裏が焼けちまう！

こりゃ、とんでもねぇ風呂だ。**前代未聞**、**空前絶後**の風呂だなぁ。



んが風呂に入ります。

ところが、弥次さんは喜多さんを困らせようとしてゲタをかくしてしまったから、また一騒動がおこります。

そう、喜多さんも五右衛門風呂が初めてなので、入り方がわからないのです。

喜多「むむむ？　こりゃ、いったいぜんたいどうやって入るんだ？
ええい、このままよ！　なるようになるさ！
清水の舞台から飛び降りる気持ちで入ってしまえ。ドッボーン。
とにかく思いきってやるしかない
アチチチチチチチチ～!!

こうなりゃ背に腹はかえられねぇ（多少のことはガマンしよう）。結構毛だらけ猫灰だらけ（よくできました）ってんだ。

あれをはいて風呂に入ってやれ」



なんと弥次さん、便所のきたないゲタをはいて、風呂に入ってしまいました。

弥次「こりゃあ、ええわい。極楽至極〜（もう最高だ〜）」

さて、すっかりいい気持ちになって湯を出た弥次さんに続いて、喜多さ

コ、スッコッって入るのさ」

喜多「ええい。ふざけないでくれよ。
釜がじかに足の裏に当たって、入れないよ」

弥次「入れるに決まってるだろう。
今の今までオレが入ってたのを知ってるだろ」

喜多「…………。おめぇ、どうやって入った?」

弥次「はて。しつこい男だ。むずかしいこたぁねぇ、初めしんぼう。すると
だんだんちょうどよくなってくらぁ」

喜多「バカいいなせぇ。

おーい、弥次さーん、てぇへんだー、
てぇへんだーー！
ちょっと来てくれ〜!!」

弥次「騒々しいなぁ、いったいどうしたっ
てんだ？」

喜多「おい、弥次さん！　おめぇ、この風
呂へどうやって入った？」

弥次「バカめ。別に入りようがあるもんか。
問答無用、まずは外できんたまをよく洗って、そして足からドンブリ

あれこれいうな



んがかくした便所ゲタをみつけました。
「読めた！」と、うなずいてゲタをはいて五右衛門風呂に入ってしまいました。
喜多「弥次さん、弥次さん！」
弥次「なんだよ、また呼んだか？」
喜多「なるほど、おめぇのいうとおり、入ってなれてみると熱くはねぇ。
あぁいい心持ちだ。
極楽極楽、旅行けば〜、駿河の国に茶の香り〜、とくらぁ」
浪曲「清水の次郎長」の一節



しんぼうしているうちに　足の裏が真っ黒にこげてしまうわぁ」

弥次「ええい、**埒の明かない**男だ」

弥次さんは心の中でおかしくてたまりません。ふたりとも、五右衛門風呂のほんとうの使い方を知らないってことじゃ、**五十歩百歩**（たいしてちがいはない）、**目くそ鼻くそを笑う**（笑うほうも笑われるほうもにたようなもの）ってやつですが、からかい好きの弥次さん、笑いながら部屋にもどってしまいました。

のこされた喜多さんはいろいろと考えたあげく、そこらを見回して、ついに弥次さ



破れた底から湯がもれだし、火の上に流れ落ちるとシューシュー音を立てました。

喜多「こりゃあ一大事、
おおーい、**助け船**（手をかせ）、
助け船ぇ～!!」

弥次「どうした、どうした、……お、
ははははは」



この騒ぎに宿の亭主が来てみれば、あまりのことに**肝をつぶした**。

ところがひとつ困ったことがありました。
喜多さんはゲタがなくても入れるのだといばってみせたので、弥次さんが見てる前では風呂から出られません。そのうちのぼせてしまって熱くなってきました。
喜多さんは、たまらずゲタでガタガタと風呂釜の底をふみつけました。
すると、ついに風呂の底をふみ抜いてしまいました。



聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥、と申します。

聞くのをはずかしがって、知らないままでは一生はずかしい

あとは野となれ山となれ！

今がよければ、あとのことなどどうでもいい！

弥次さん喜多さんの旅はまだまだ続く。

以下次巻！（ないかも！）



亭主「うわわわわ。これはまた、どうして、風呂釜の底が抜けたんですか？」

喜多「つい、ゲタでガタガタやったから、抜けちまいました！」

亭主「なにぃ!?　おまえさんは**途方もない**（常識はずれの）お人だ。

風呂に入るのにゲタをはいて入るということがあるものですか！

どうしようもない人だ！」

喜多「いや、オレも最初は、はだしで入ってみたけど、あんまり熱いからさー」

亭主「いやはやなんとも。にがにがしいことだ。

ここは風呂釜代を弁償してもらいましょう」

弥次「…………。しかたあるめぇ。**自業自得**（自分が悪い）。**身から出たさび**（苦しいのも自分のせいだ）ってやつだ～」

弥次さん　喜多さんの



百戦錬磨

「錬磨」は、鍛えて磨きをかける。つまり、数々の戦いで鍛えられ、磨きあげられた、経験ゆたかな強者ってわけだ。そんじょそこらのひよっこじゃ、相手になんかなりゃしねえ。あ、これはもちろんオレ様のこと。



海千山千

昔から、海に千年、山に千年暮らしたヘビは、竜になるっていわれてるんだ。このヘビのように、いろいろな経験をして、世の中の裏も表も知りつくし、じょうずに世間をわたっていくのが、オレたちのような「海千山千」のしたたか者さ。



悪戦苦闘

長い人生、いつも順調とはかぎらない。ときには苦しく、不利な戦いもあるわけだ。けれどもそんな困難には、死にものぐるいで立ち向かう、必死の努力で対抗する。そして「悪戦苦闘」の末に、見事に勝利するわけさ。



試行錯誤

「試行」は、試しにやってみる。「錯誤」は、まちがえること。よーするに、答えがわからなければ、一度でうまくいくことはない。いろいろ試して、やってみて、失敗やまちがいをくり返しながら、正解に近づいていくってことだな。

日本語よもやま話



揚げ足を取る

相撲や柔道で、相手が技をかけようとして足をあげたとき、そのあげた足をつかんで、倒しちまう。これが「揚げ足を取る」のはじまりだ。そこから、相手のいいまちがいや、言葉のはしをとらえて、からかったり、バカにしたりすることをいう。「揚げ足取り」は、揚げ足を取るヤツのこと。



前代未聞

「前代」は、前の時代で、今まで。「未聞」は、未だ、聞いたことがない。よーするに、今まで聞いたこともないような、めずらしい、おかしな、ってぇことだな。



肝がつぶれる

「肝」は、肝臓のことだが、勇気や度胸は、「肝」にあるって考えられているんだ。たとえば「肝が小さい」っていやぁ、気が弱くて、いつもびくびくしているヤツのことだ。その「肝」がつぶれるってのは、めちゃくちゃびっくりして、度胸も何もなくなっちまうって感じだな。



思案のしどころ

「思案」は、いろいろとよく考えること。つまり、ここが大事なところ、いいかげんに決めちゃいけねえ。よーく考えて、知恵を出せってことだな。あせらず、ゆっくり考えろよ。

弥次さん　喜多さんの



清水の舞台から飛び降りる

京都に清水寺って寺がある。この寺の舞台は、ガケの上にあってな、下をのぞくと、お～おこわい！　そこから目をつぶってエイと飛び降りるように、死んだ気になって、思いきってやってみることだ。



問答無用

問いも答えも用は無い。あれこれ話し合っても役に立たねえってこと。よく「問答無用」って、相手に斬りつけたりするだろう。「つべこべいうな」ってわけだ。



五十歩百歩

昔、中国で、孟子という人が王様にいったんだ。「戦いのとき、武器をすて、五十歩逃げて止まった者が、百歩逃げた者を、自分より臆病だといったらどう思います」。王様はいったそうだ。「五十歩でも逃げたことには変わりない」。見た目に少しは差があったとしても、結局は同じってことだ。



目くそ鼻くそを笑う

目くそと鼻くそ。どっちが上もありゃしねえ。ところが目くそが「おまえさんはきたないねえ」と、鼻くそを笑いものにした。自分の悪いところに気がつかず、他人の同じような欠点をバカにする。まわりから見りゃ、どっちもどっちだ。



日本語よもやま話



臨機応変

昔の中国、梁の国の軍の総司令官の言葉だ。「機に臨み変に応ず」ともいう。何がおきても、そのときの様子や、物事の変化に応じて、ちゃんとそれにあった行動をするって意味なんだ。



背に腹はかえられない

何か大きな問題がおきて、とにかくそれを乗りこえなくっちゃいけないとき、そのために、ほかのものをぎせいにしなきゃいけないことがあるわけだ。たとえば腹を守るために、両手で腹をだきしめて、相手に背を向ける。背中に傷がつくかもしれなくってもな。



結構毛だらけ猫灰だらけ

「結構」は、すばらしい、よくできているの意味だ。だが、これだけではつまらねぇ。「結構毛だらけ猫灰だらけ」。声に出していってみな。なんだかウキウキするだろう。これがオレたちの言い方ってわけだ。



極楽至極

「極楽」は、仏教の「極楽浄土」を短くいった言葉で、まぁ、天国ってことだ。「至極」を言葉の最後につけると、「このうえなく、まったく」ってな意味になる。つまり「極楽至極」なら、「まったく天国のようだなぁ」ってこと。喜多さんのようなヤツのことは「迷惑至極」ってぇいうわけだ。

弥次さん　喜多さんの



聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥

人にものを聞くのは、正直はずかしいもんだよな。そんなことも知らないのかって、思われるのもイヤだしな。でも、ちょっと待て。知らないことは、聞かなきゃ結局わからねえ。わからないままで一生過ごし、知らないまんま死んじまうのは、はずかしくはないのかい。それなら、聞くときだけはずかしいほうがマシじゃあねぇか。いや、むしろ、はずかしがらずに、どんどん聞くほうがいいだろう、ってことだ。「聞くは一旦の恥、聞かぬは末代の恥」って言い方もあるな。



あとは野となれ山となれ

まぁ、とにかく今は、目の前の問題が片づけばいい。今がよけりゃ、あとのことなど、どうでもいいさ。やるだけやったら、あとはどうなろうが知ったことじゃねえ。そんな、オレたちの気分をあらわす言葉なわけよ。もとは、家や町のことをいったらしいな。今、このときさえ栄えていれば、あとでつぶれて、なんにもない野原や山になっちまってもかまやしない。大切なのは今なのよ、ってことさ。

日本語よもやま話



助け船

「助け船」は、川や海でおぼれた人や、遭難した船を助ける救助船のこと。「すくいぶね」ともいう。で、ここから、困ったときに手をかしてくれる人、助けてくれる人のことを「助け船」っていうようになったんだ。



途方もない

「途方」ってのは、方向のことで、そこから方法とか方針、物の道理なんかをあらわす。だから「途方もない」は、「道理にはずれた」とか「とんでもない」って意味になる。ふつうの人の考え方や、常識からはみ出しているってえわけだな。



自業自得

仏教では、ひとつのおこないがある結果を生み、その結果が次の行動の原因になると考える。こうしたおこないのことを「業」といい、自分の「業」の結果は、自分で引き受けるべき。これが「自業自得」だ。まあふつうは、自分のやった悪事の報いは結局自分に返ってくる、って意味で使うな。



身から出たさび

刀からさびが出れば、結局、その刀自身をダメにしちまう。よーするに、自分のおこないや失敗が、あとで自分自身を苦しめるってこと。「自業自得」と同じこったな。

あるよ。そこのは全部が鉄でできていて、ホントにふたをふんで入るんだ。鉄のザラザラした表面で背中をかくと気持ちよかったなぁ。もちろんゲタは、はかなかったけどね（笑）。

気の合う友だちとふたりで旅をするのっていいね。テキトーなことをいいながら、あれこれちっちゃな冒険をするのは楽しい。旅ってほどじゃなくても、友だちと一緒に近くを探検してみなよ。いろいろ話をしながらね。

最後にひとつ、僕と約束をしてほしい。

「ぜったいに『ウザイ』『キモイ』っていわない」ってこと。

このきたない言葉は、人をきずつけ、自分をよごしていく。そんな言葉のかわりに、弥次さん喜多さんの豪華な日本語を使ってくれ。

これが僕からのお願いだ。

齋藤　孝

弥次さん喜多さんの日本語で遊ぼう

どうだった？　ためになる日本語が「仕掛け花火」みたいに出てきて豪華だったでしょ？

江戸時代の人って、ホントに言葉遊びが好きだったんだよ。言葉で遊ぶって、ホントに人間らしい遊び方だよね。

みんなも、ことわざや日本語独特の言い回しを使って遊んでね。

僕の生まれたところは静岡市で、東海道が目の前だったんだ。だから、弥次さん喜多さんの旅が身近に感じられた。「丸子のとろろ汁」の話とかね。

今回は静岡まで行きつけなかったけど、次の巻では僕の地元にも行きたいなぁ。

五右衛門風呂の話だけど、僕は子どものころ、親戚の家で入ったことが

索引

「弥次さん 喜多さんの 日本語よもやま話」のページを表示しています。

た行

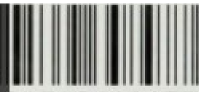
な行

は行

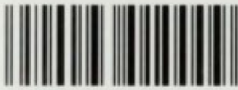
ま行

や ら わ 行





84569648477



1920093010009

ISBN4-569-64847-9

C0093 ¥1000E

定価：本体1,000円（税別）

PHP研究所

